

## 第 2 回・しあわせの村リニューアル検討有識者会議 議事録

令和元年 10 月 30 日（水）13 時 45 分～

しあわせの村研修館 第三研修室

## 1 開会

## 2 議題

(1) 前回の振り返りとしあわせの村の新たな取り組みについて

・資料 3・4 について事務局より説明

(委員) IT 企業として、ソフトウェアやクラウドの開発が専門である。神戸の身障者 NPO 法人とのパートナーシップで、しあわせの村での施設案内の AI サイネージの共同開発の経緯もある。障害者や高齢者の生活が楽になるための IT 有効活用について興味がある。特に移動支援について、歩行困難や移動困難な方が多い。認識障害で標識が読めない方もいる。村内で、できれば社会実装される前の実験的な取り組みについて、プロトタイピングを積極的に行うことができるとよい。

(委員) 障害者のコンピューターを使った就労支援に取り組み 30 年になる。村で最先端の技術を活用し、障害者や高齢者の未来のためのモデル事業を行っていくべき。車の自動運転、車いすの自動運転が今後重要になるだろう。海外ではキャリーバッグが人を案内する研究も進んでいる。

今年ユニバーサルドローン協会立ち上げた。ドローンには大きな可能性がある。災害時や人命救助等にも大活躍している。たとえば、温度センサーをつけたドローンは人体の温度を感知できるため、崖からの滑落者や雪山での遭難者の救助に役立つ。今後ドローン技術者の育成がますます必要になる。

ドローンは身体の不自由な方も操縦ができる。村をそうした育成の場として活用していくべき。しあわせの村と最新技術の融合に期待したい。

(委員) 自身の弟も障害を持っており、外出が困難である。IT を活用できればそうした人の社会活動の選択肢も広がり、居場所作りにも役立つのでは。IT には可能性がある。ただし、使うにあたっては、安全・安心に利用できるように、障がい者の理解・支援が必要で、こうした点を踏まえて導入していくべき。また、児童の体験プログラムというのは、直接体験が少ないことから、平成 10 年の学習指導要領改正で学校教育での体験学習を進めていくというところが最初のスタートであったが、学校教育だけではまかないきれないので、人や社会、自然と関わり実体験をすることで子供を育成することがテーマになってきている。このしあわせの村でそういった体験活動ができればよいと思う。自然体験学習はしあわせの村でも可能であり、直接体験を通じて生きる力をつけていくというのと、プログラムに関わる青年達や高齢者の方の出会いを生み出していくことによって、子供たちが社会に触れていくきっかけができないかと思う。しごとを通じたまちづくりという意見が出ているが、そこに住む子供たちをターゲットにして、色々な方が関われる仕組みを作っていけないかと思う。まちづくりの発

想がいると思うが、そういう意味で子供たちというのは未来を見つめるためによい存在であると感じる。もちろん、障害者や障害児も参加できるプログラムであるべきである。しあわせの村ならそういった実現もできるはず。

(委員) 前回でも意見を述べた通り、シェアオフィスに関心がある。障害者の超短時間雇用に取り組んでいるが、神戸の拠点としてしあわせの村に先端研オフィスがほしいと考えている。拠点を持つことで地元の人とも連携できる。そのためにはシェアオフィスとハウジング機能がセットであるとよい。新エネルギー、子ども食堂、超短時間雇用等、先端研の様々な取組の専門家や全国で活躍している人々もシェアオフィスに呼び込めるとよい。シェアオフィスでの交流によりイノベーションが推進される。ハウジング（ソーシャルアパートメントなど）でも同様に、住民同士の交流、情報交換により新たな事業が生まれることが期待できる。

市にベネフィットを提供してくれるのであれば安価や無償で使用できるなどの条件で呼び込めればよいのでは。ベネフィットの判断基準としては、例えば、仮想通貨を発行して、シェアオフィスによるサービスの市民の利用実績を記録できると、市への貢献度を評価することができる。しあわせの村がそうした取組のメッカになるとよい。

また、しあわせの村に生活拠点を構えるにあたって、市街地への移動などモビリティが課題となる。ウーバーのような仕組みを活用し、元気な高齢者（MCI など）も含めて運転手として活躍してもらえれば利便性が高まるのではないかと。

シェアオフィスとソーシャルアパートメントがセットになっている例はなかなかないが、村では実現可能ではないか。共用エリアと個別スペースで構成されているシェアオフィスや、大きな共用空間があるソーシャルアパートメントによって、イノベーションが推進される。先端研がまさにそうしたイメージで、普段は研究所にていろいろな人が集いつつ、プロジェクトが立ち上がると部屋を確保してプロジェクトを回している。人が集まりたくなるシェアキャンパスのようなものがあるとよい。そこにシルバーカレッジも加わってくるとよい。シェアキャンパスで神戸市内の課題を解決できると楽しいのでは。ここで働くことが誇りになるような魅力的な環境であることがポイント。

(委員) プロジェクトにかかわる人達を「関係人口」と捉え、村のイノベーションに関わってもらいたいイメージ。こうしたシェアオフィスやハウジングに外国からの研究者や事業者が集うような村になると、国際都市神戸の名に相応しい取り組みになるのではないかと期待している。日本人の働き方や生活を変えてくれるような海外の研究者や技術者等が来てくれ、発信してくれるとよい。

(委員) シェアオフィスでの知の共有は重要。フィジカルでなくバーチャルによって共有できる観点もあるとよい。リモートワーク（アカウントユーザー）の活用も村のステークホルダーとして視野に入れるべき。距離への挑戦・克服。外出ができない重度障害者等もリモートで参加できればよい。

(委員) 認知症の新しいテクノロジーを使った実験的取り組み（見守りや早期発見）が注目されているが、個人情報等の制約があり難しい面もある。まちづくりのため、という観点からしあわせの村を実証の場として規制緩和の適用を受けていくことが必要ではないか。また、先ほど高齢者を活用したモ

ビリティの意見があったが、高齢者の免許返納が期待される中、運転者として活用していくのは難しい問題もある。

(委員) 村岡委員の「プロトタイプ」という言葉が印象的だった。村に来たら e スポーツが楽しみ、人や社会とつながれる拠点になるとよい。

健康づくり、という観点では、30代女性の体力低下が課題（学校教育で最も体力低下が言われていた世代）となっているが、村の取組のターゲットから抜けているのではないかと。30代は子育て期でもあるので、子どもから離れて、自分の健康のためにスポーツができる仕組みが必要では。その間、村の高齢者が子どもをみてくれるサポートがあるとよい。

(委員) 神戸市ではひきこもりの支援が課題となっている。バーチャルユーチューバー（Vチューバー）や e スポーツも含め、多様なアプローチを検討してもらいたいと考えている。生身での交流につなげるきっかけとして、バーチャルという新しい空間を活用できればよい。

村のまちづくりの観点からみると、今は「居住人口」がいないが、関係人口やメンバーシップも含めて「村民」をどう想定していくかが重要。

(委員) ここで生活するために必要なこととして、交通問題はもちろんだが、ずっと住み続けていくためのインセンティブが必要ではないか。その一つとして「しごと」は分かりやすいインセンティブである。従来のオフィスで働くことが困難な障害者や高齢者が働ける環境づくりをこの村でプロトタイプングしていくと、神戸市だけでなく全国的なモデルとなるのでは。仕事について4点ほどアイデアを述べたい。

まず、①ドローンの遠隔作業は高齢者や障害者にも担うことができる。ドローンは身体能力の拡張といえる。ITにより障害者等の活躍の機会が広がる。村にそうした訓練設備があれば、高齢者や障害者の仕事をつくることは可能ではないか。

②Vチューバーを仕事に活用する実証が進んでいる。オフィスに受付スタッフを置くことが難しい中、サイネージや遠隔操作ロボットが接客をするなど。東京のカフェでは、遠隔操作ロボットが接客を担う実証実験が行われた（ロボット接客カフェ「DAWN ver. β」）が、埼玉県などの寝たきり障がい者が操作していた。こうした取り組みが普及すると寝たきりの障害者が喫茶店でバイトできる時代になる。

③AI開発で最も工数が必要となるのは、AIに学習させるためのデータ（教師データ）作成・整理作業である。単純作業なので、障害者・高齢者が担っている海外事例もある。リモートワークで可能であり、世の中のニーズも高く、こうした作業を高齢者や障害者に支援してもらえるとよい。

④eスポーツは、ゲームが好きな引きこもりの人が外出する誘因材料になっている。長時間集中して動体視力・反射神経を鍛える必要があるため、プロはアスリート並みのトレーニングが必要となる。プロになるためのトレーニング設備があれば全国からプロ志向のゲーマーが来村する可能性がある。

(委員) 幅広い世代の多様な子どもを対象にしたハイキングコースなどもよいと思う。あえて距離を楽しむといった考え。今の子どもには社会活動、集団体験活動が重要。人や自然や社会と関わることを直接体験しないといけない。人間関係が難しい子供が増えている。子どもがピュアなものに触れる機

会を作ってあげる仕掛けが必要であり、その仕掛け作りに地域の人が参加することでまちづくりにつながると思う。この村に、多様な物事にふれることができる施設をつくっていききたい。

(委員) バーチャルは重要だが、現実との接続は確保すべき。先端研でも遠隔で重度障害者をプロジェクトの主任として雇用しているが、遠隔ですべてがうまく機能するわけではなく、必要に応じて出勤いただいている。リモートワークは必ず必要だが、それを実現するためには、様々なルールや仕組み作りが必要となる。

また、現場に行きたがる人をオンラインで雇用するとミスマッチが生じてしまうため、各人の希望をくみ取りつつ、柔軟な雇用形態、それに基づく運用ルールを策定することが必要である。

今の障害者雇用は、介助者が必要な人は雇ってもらえないことが多い。介助のあり方についても、オンラインなども含め選択肢を増やせないか検討している。

文字通訳を行う仕事も遠隔で障害者ができる。AIの音声認識のサポート（リスピーク、起こされた文字の修正など）も障害者雇用を検討している。先ほど話に出た教師データ作りで、自閉症の人が活躍している話もある。いずれの場合も、リモートワークと現場をコーディネートする人が必要。

現実と切り離さないというポリシーをもってバーチャル雇用のあり方を考えていきたい。

(委員) ITの専門家の立場から言いたいのだが、目的と手段を取り違えてはいけない。仕事を達成するという目的に対し、AIやリモート雇用はあくまで手段としてのサポートツールである。目的がAIになっているパターンが非常に多い。高齢者や障害者のしごとづくりや、パラスポーツの推進という目的達成のための手段がAI等のテクノロジーという観点を忘れないように議論したい。

(2) しあわせの村で取り組む“しごと”の創出と、地域との連携について

・資料5・6・7について事務局説明

**資料5** 建築住宅局住宅整備課より

ひよどり台団地（昭和50年に町開き）

・位置：しあわせの村南東

・面積：約100ha

・人口：約6500人（ひよどり台2～5丁目・H27国調）⇔対10年前 約12%減

・世帯数：約3100世帯⇔対10年前 6.5%減

・高齢化率：45%（市営住宅だけでは59.1%）⇔市内平均21～22%

・市営住宅：約20棟（605戸）、EVのない団地のような階段式住居。4・5階から空き家が出てくる。

・入居率：66.2%（402世帯／605戸・H30年度末）⇔市内市営住宅の平均入居率 約80%

今後どのように再編するのか。現入居者への対応や空き家の活用、立替を行った場合に余剰地をどうするのか（人口が減っているのに住宅を作るのか）など、市営住宅だけでなく地域全体で、村との連携を含め、どのように再編していくか考える必要がある。

(委員) 市内で数ある市営住宅再編の中で、ひよどり台の優先度は高いのか。

(事務局) 市営住宅再編計画は10年単位の計画で、現在2021年度以降の次期計画を策定中。ひよどり台の再編はその次期計画に位置付けて進めるもので、すでに現計画においても、今後市内で優先度の高い4団地のうちのひとつと位置づけられている。

(委員) ひよどり台と村をワンパッケージとして、一つの都市機能、エコシステムとして検討してもよいのでは。ひよどり台と村を含めた生活圏をどう快適に整えていくか、それを誰が担うかが議論のポイントではないか。例えば団地内の飲食店の事業者をしあわせの村の事業者としてカウントするなど。歩いていける距離、パーソナルモビリティでいつでも行ける距離をいかすべき。遊べる・働ける・暮らせるしあわせの村+住居としてのひよどり台を1パッケージで考えると、ユニークでよい。

(委員) 取組が実現されれば、世界から注目される魅力的な村にすることができる。市がコンセプトをしっかりと打ち出して、実現に向けて踏み込んだ議論をしていきたい。神戸には海があり、一方で山と緑がある。今までは山と緑の活用は進んでなかったが、今回の取組を契機にしたい。

(委員) 海外との競争力のある都市を目指すために、村には大きなポテンシャルがあると思う。

(委員) 障害者雇用で重要なことは、職場のアクティビティが高くて仕事が多くあるということだと考える。アクティビティの高い人・障害に理解のある人を同時に呼び込み、仕事が生成される現場であることが重要。呼び込むときの条件やポリシーを示しておくべき。  
障害のある子どもがいる家族が働く拠点（サテライトオフィス）としても良いのでは。ヨーロッパの人はサテライトオフィスで働くことは一般的なので、近隣のグランピング等とも連携し、インクルーシブツーリズムとセットで呼び込むとよい。

(委員) ICTの発達により、「しごと」の性質がこれからの時代変わっていく。人の特徴、強味に合わせたものが仕事になりうる、人が人らしくあるための仕事をICTのアシストによって創出していく時代である。

(委員) 人類の叡智は不可能との闘いの歴史であり、不可能への挑戦がイノベーションを生み出してきた。不可能をより多く持っている人こそが最先端であり、障害のある人にこそ発展のカギが詰まっている。この村がその拠点になってもらいたい。障害者感をよりポジティブに転換する覚悟が必要。

(委員) AI時代におけるビジネスでも、人間が媒介することが必須である。例えば自動運転で事故があった際、AIに責任を負わせられない。直近数十年は人間が人間に対して責任をとる時代がこれからも続くと考える。

全盲の方向けにハッカソンを行った時、スクリーンリーダーというソフトを使用した読み上げスピードが通常の2.5倍の速さでも理解されていて驚いたことがある。障害者は健常者よりも高いパフォーマンス

ンスを発揮することもある。障害者が色々な人と触れ合うことで今までにない価値を発見することにつながる。その拠点となってほしい。

(委員) スポーツは非日常であり、人と人がつながれる要素がある。しあわせの村はこれまで非日常において人とつながることができるノーマライゼーションの場であったが、今後日常につながる「しごと」を考えていくということは、今までと価値観の転換が必要。

(委員) 村はこれまで「ノーマライゼーション」だけでやってきて、この30年で息切れした印象がある。価値観を時代にあわせて更新しながら、次の30年を見越した議論をしていきたい。

### 3 事務連絡

次回の有識者会議は2月頃を予定。

### 4 閉会